

白藍塾オリジナル

2011入試小論文分析&解答のヒント

2011年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●東大後期・総合科目Ⅲ

昨年度同様、課題文を読みとるだけではだめで、特定の分野についてある程度以上の知識がなければ答えにくいという点で、今年度もかなり難易度の高い問題となっている。ただし、このレベルの課題に十分な答案を書ける受験生の数は相当限られるはずなので、あきらめないで、自分の手に負える範囲で、一貫した文章を書くことが大切だ。

第一問は、政治哲学者ハンナ・アレントの唱える「公共空間」について論じた文章だが、内容的にかなり難しい。「公共空間」「社会的なもの」「政治(的)」などの用語が一般的な意味合いとはやや違った意味合いで使われていて、しかも何の説明もされていないので、とまどう人も多いただろう。

そこで、これらの用語の使われ方を図式的に整理しながら読むことが必要だ。そうすれば、「社会的なもの」と「私的なもの」が相補的なものとして捉えられ、さらにそれらが「公共的なもの」と対立するものと捉えられているのがわかるはずだ。また、「政治的」という語は、ほとんど「公共的」と同じような意味で使われている。こうした図式を押さえておけば、個々の用語の意味がぴんとこなくても、何とか課題文の大枠を理解できるだろう。

その点を踏まえて課題文を大ざっぱにまとめると、次のようになる。「現代人は、社会(公共機関)に保護されて生活している。そうした保護された空間に身に置いたまま、人々は無責任にそうした社会を批判し、政治的参加をせずに政治的な発言をするようになっている。古代ギリシアにおいては、人々は、公共空間に身を置いて、自

分の振る舞いのすべてに責任を持ち、政治的な事柄にかかわっていた。だが、近代以降、公共空間が衰退し、私的なものへの関心が高まって、現代人は公共空間と私的空間との区別のない『第三の空間』に属するようになった。そのため、政治的な事柄に対する責任を求められなくなったのである。とはいえ、現代でも、公共空間が完全になくなったわけではない」

問一は、「公共空間」と「私的空間」の関係の歴史的な変化を踏まえて、三つの時期の特徴を説明する問題。課題文からは、「古代ギリシアでははっきり存在していた公共空間が、次第に私的空間との区別を失い、衰退していった」という歴史観がうかがえるので、それを三つの時期に当てはめればよい。とはいえ、ある程度世界史の知識がないと、十分な説明は難しい。

古代ギリシアについては、当時の都市国家（ポリス）が直接民主制で、すべての市民が政治（公共的なもの）に対する責任を負わされていたことを思い出すと、説明がしやすい。次のローマ時代は、公共空間と私的空間の区別が曖昧になり始める時期とみなせるが、それを歴史的な背景を踏まえて説明するのはやや難しい。「ローマ法などの法体系や、ローマ水道などの公共施設が整備され、社会が個人を保護するようになった」「その一方で、共和政から帝政へと移行し、市民の政治参加の自由が失われていった」という程度の知識があれば、この時期の特徴をうまく説明できるはずだ。全体主義については、個人の自由や主体性が全体（国家）に抑圧される体制であることを知っていれば、それが個人の私的空間を奪う一方で、個人の主体的な政治参加によって成り立つ公共空間の喪失をも促すことが理解できるだろう。

基本型Bを使って、そうした各時代の特徴を段落ごとにくわしく説明した上で、最後に全体の流れをまとめるとよい。

問二は、小論文問題。第一段落で「第三の空間」の説明をした上で、この「第三の空間」が公共空間として十分に機能するかどうか、問題提起の代わりに自分の意見をずばり示す。そして、第二段落以下で、それを検証していく形にするとよい。ただし、イエスの場合は、「どのようにすれば可能になるか」（対策）も書くことが求められている点に注意が必要だ。

抽象的に考えると難しいが、課題文の中でテレビやインターネットなどのメディア環境が「第三の空間」の例として挙げられている点を踏まえると、ネット社会やメディア社会の問題として考えることができる。イエスで書くなら、「インターネットを通じて発信した事柄は、不特定多数の人に受信される。そのため、誰もが公共性を強く意識するようになる」「インターネットは、個々の社会を超えて、世界中の個人の声を結びつける媒体になる。インターネット自体が巨大な公共空間になりうる」など。ノーで書くなら、「現代の社会はマスメディアに支配され、個人の考えや意見もメディアによって画一化されているので、個人が主体的に政治参加することは難しい」などが考えられる。字数も少ないので、あまり深く掘り下げる必要はないだろう。

第二問は古文を読ませる問題で、荻生徂徠の『政談』からの抜粋。江戸時代の古文

は比較的読みやすいとは言え、これだけ長く、しかも決してわかりやすいとは言えない古文を読むのは、時間的にもかなりきつい。徂徠の政治思想について少しでも知識があれば、それを踏まえて何とか設問に答えることもできそうだが、そうでない場合は、とにかく読みとれる箇所からヒントになりそうな内容を探すしかないだろう。

問一は、「政治と道德の関係に関する荻生徂徠の考え方」を説明する問題。とはいえ、課題文には「政治」という語も「道德」という語も出てこないので、キーワードを拾って読みとろうとしてもそれはできない。この場合は、やはり傍線部の前後の文脈を何とか読みとるのが早道だ。親を捨てて逃亡した農民について、「(その頃は) 心の上の詮議専ら也」とした上で、大名の諮問に対して自分が「悪いのは代官などの役人であって、本人の罪は軽い」と答えたことが記されている。つまり、本人の道德(心)の問題にすり替えるのではなく、人民をそこまで追いつめた政治の責任を追及すべきだ、と言っているわけだ。そのことさえ理解すれば、徂徠がさまざまな社会問題を、個人の道德の問題から切り離し、あくまでも政治の問題として、政府が積極的に改革に取り組むべきだと考えていることがわかるはずだ。

問二は、徂徠が「当時の社会が直面していた問題をどのようにとらえ、またそれに対してどのような解決策を提示しているか」を述べる問題。問一が答えられれば、こちらも何とか答えられるはずだが、課題文のさらにていねいな読み取りが必要になる。徂徠は、農民が生活に困ってその土地から逃亡したあげく、乞食・非人にまで身を落としているだけでなく、支配階級である武士まで同じような境遇に陥っているような社会状況を問題にしている。これは、当時の封建社会を成り立たせていた幕藩体制や身分秩序を脅かす事態だと言える。それに対して、徂徠は、武士が外聞を気にするのをやめて統治者としての責任を自覚し、道德心に訴えるのをやめ、法に則って政治の役割をきちんと果たすことを求めている。そうしたことを説明できれば十分だろう。

いずれも説明問題だが、字数が多めなので、基本型Aを使って、課題文の中に出てくる具体例をできるだけくわしく説明するとよい。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>